

偶然と必然の 〈あいだ〉

不条理な災厄に遭遇した人は何を考え、どのようにふるまおうとするか。偶然と必然の 〈あいだ〉 に位置する「運命」について、易の思想を参照しながら考える。

I 易と中庸

○易とは何か → 「資料」

吉凶を占うことで、決断のための判断材料を提供する當為

→Ⓐ陰陽にもとづく自然哲学（宇宙論）

○儒教の倫理

人間世界の道徳——五倫五常

→Ⓑ「中庸」——状況に応じた 〈よさ〉（過不及の中）の実践

○易と中庸

Ⓐ宇宙論とⒷ倫理とは、天命に従う「誠」によって一体に結びつく → (1)

II 運命——偶然の必然化

- ・偶然を「運命」として受け容れる態度 Cf. 「五十にして天命を知る」（孔子）
- ・「無力な超力」 → (2)

[資料]

・易とは何か

中国における易の歴史は古く、殷時代に遡る龜卜が筮竹を用いる卜筮に代わられ、やがてその教えを体系化した易經（周易）が成立した。易經は、易の内容を説明する經文（上・下）とその意義を理論的に説明する十翼から成る。易はその成立過程で儒教と結びつき、四書（大学、論語、孟子、中庸）と並ぶ五經（易經、詩經、書經、春秋、礼記）の筆頭に挙げられる儒教の最重要古典となった。

易による「占い」は、天地人すべてについて、起こりうる状況を分類して示し、態度決定に迫られる当事者に対して、「吉凶」のしるしとともに判断の材料を提供する——未来の予知や予言よりも、判断主体が行為の指針を得ることに意義がある。宇宙の生成変化と人間世界の現実とが結びついた状況を把握することにより、その状況にとって最適の選択が可能になることから、儒教と結びつく。仁義など儒教の道徳は、「時」（時機）と「位」（立場）に応じた状況判断によって成立する〈正しさ〉を表す。こうして易の宇宙論と儒教の倫理とは、矛盾なく一つに結びつく。

易が取り扱うのは、天地人「三才」の道——「天」は宇宙、「地」は人間世界・政治の状況、「人」は個人。天は「陰陽」、地は「剛柔」、人は「仁義」、これら三才にわたって〈中〉を求める。陰（）陽（）の爻を三つ重ねてできる三爻 8 とおりの組み合わせが八卦（図参照）、さらに八卦を組み合わせることで得られる六爻を単位とする 64 とおりの卦（六四卦）によって、天地人のすべてのあり方が尽くされる。『易經』の經文は、六四卦を上下に分けて配列しており、それぞれの卦についての説明（卦辭[彖辭]）、卦を構成する爻についての説明（爻辭[象辭]）が付けられている。

[文献]

(1) 「天の命ずるをこれ性と謂う。性に率うをこれ道と謂う。道を脩（修）むるをこれ教と謂う。道なる者は、須臾も離るべからざるなり。離るべきは、道に非ざるなり。」

(天が、その命令として[人間や万物のそれぞれに]わりつけて与えたものが、それぞれの本性である。その本性のあるがままに従っていく[とそこにできあがる]のが、[人として当然にふみ行なうべき]道である。その道を治めととのえ[て誰にでも分かりやすくした]のが、聖人の教えである。道というものは、[いつでもどこにでもあるもので、]ほんのしばらくの間も人から離れることのないものである。離れられるようなものは、真の道ではない。)

（『大学・中庸』金谷治訳注、岩波文庫、1998年、141-143頁）

(2) 「運命は自己交付的決意性の超力（Übermacht）と無力(Ohnmacht)との結合にある。開示された状況の偶然性に直面して情熱的に自己を交付する無力な超力が運命の場所である。将来的たるとともに根元的に既存的な存在者が有限性において可能性を自己自身に与えながら自己の被投性を受取るのが運命である」（九鬼周造『偶然性の問題』岩波文庫、2012年、255頁）

[概要]

哲学対話のテーマに合わせて、「運命」の問題を取り上げた。易を話題にするのは初めてのことだが、現在執筆中の『中のロゴス』に深く関係する。

I 易と中庸

○易の意義

易は平たく言えば「占い」、「中庸」は儒教道徳。易と儒教とが一体かといえば、「？」である。戦前に書かれた武内義雄『易と中庸の研究』(1943年)から、両者の一体性を知った。

易者に見てもらったことはなくても、お御籤を引いて吉凶を気にした経験は、誰にでもある。未来予知を確信しているわけでもない人が、お御籤を引こうとするのは、どうしてか？仮説——「近い将来がどうなるかについて切実な関心を抱き、自身の選択を確かなものとするための指針を求める」。がんらい不可能な未来予測。判断材料を提供して、決断を助ける技術が、中国古代（殷周期）に発展して『易經』を生み出し、易学を発展させた。

易とは何か——「資料」参照。天地人の相関する宇宙のありかたは、「卦」と「爻」の組み合わせによって説明される。「太極」から分かれて生じる「八卦」、それを重ねることで成立する64のパターンが「卦」、卦それぞれにおける「時」と「位」の区別を表す6つの「爻」により成立する $64 \times 6 = 384$ とおりの「爻」のいずれかが、吉凶のしるしとともに決断を欲する当事者に示される。「当たるも八卦…」というのは、どのパターン（卦）に当たるかは〈偶然〉の問題だということである。偶然を受け容れ、そこから生じる結果を受け容れることにより、偶然は必然化して「運命」となる。

○中庸の徳

儒教は「五倫五常」（孟子）の世界。重要なことは、仁義などの道徳が、いついかなる場合にも絶対無差別的に妥当するのではなく、「時」（状況、タイミング）と「位」（主体の地位、境遇）に応じて、「適度な仕方」で發揮されなければならないということである。適度な仕方での実践が、「中庸」とされる。中庸が意味する「過不及の中」は、儒教倫理の核心に位置づけられる。選択を迫られる局面において、当人の立場にふさわしい中庸の徳を發揮できることが、易を活かす条件となる。こうして易と中庸とは、一つに結びつく。

○〈中〉の形而上学

易と儒教の結びつきは、天（陰陽）・地（剛柔）・人（仁義）という三極にわたって、〈中〉に立つべきことを説く。天地人の一体性——「天人相関」の思想——を孟子が強調したことから、「天命」が『中庸』のテクストに取り入れられた。天命を自身の「性」として自覚する心のはたらきが、『中庸』の説く「誠」の思想である。→資料（1）

これによって、儒教の人間道徳は宇宙自然の生々作用と一体ではなく、という宇宙論的

形而上学が完成した。私は、これを「〈中〉の形而上学」と呼ぶ。

II 運命——偶然の必然化

易は、人力では変えることのできない運命的なめぐりあわせを提示して、それへの対応を促す。そのめぐりあわせは、そうでないことがありえたという意味では「偶然」そのものだが、そういうめぐりあわせを自分のものとして引き受けることによって、一種の「必然」と化す。偶然を必然化することによって、不条理な災厄は「運命」という意味をもつことになる。

「偶然性」をライフワークのテーマとした九鬼周造。その運命論では、ハイデガーの「被投的企投」を「無力と超力」に読み替える。難解ではあるが、「もうアカン」という絶望から開き直って、「なら、やったろうやないか」というエネルギーが生まれる不思議を表したものと読みとれる。→資料（2）